

第99图 岩倉1号~3号墳外形图

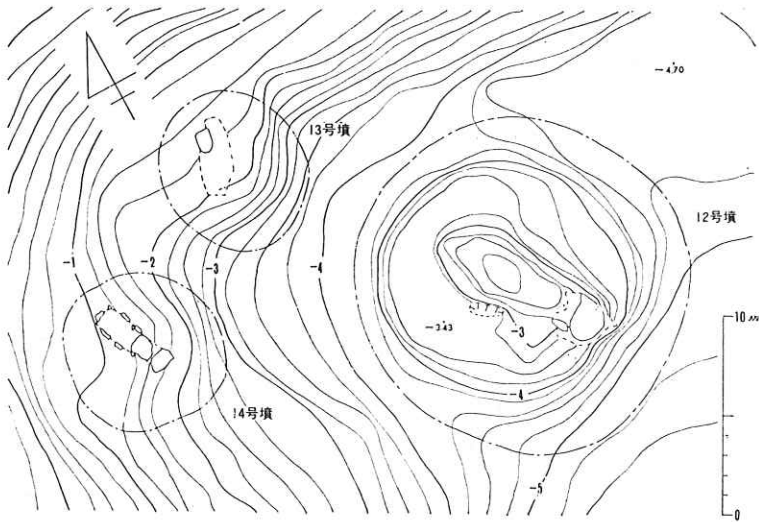
出土遺物は第8表の通りである。

須恵器	坏身	9
〃	坏蓋	15
〃	壺	3
	高坏	8
鉄鍬		18
鏡および	兵庫鎖	1
轡		1
留金具		3
金環		2
管玉		3

第8表 岩倉3号墳出土品一覧

坏蓋は第104図1・8が羨道の支門付近左側壁から、
 2・5・10は羨道から出土したものである。1は口縁部
 径二三・八センチ、高さ五・一センチあり天井部は丸
 い。ヘラ削りは認められない。

坏身は13・14は羨道部支門近くの左側壁付近から出土
 し、15は支室、16は羨道の堆積土中から検出された。4
 は口径一〇・九センチ、高さ三・七センチあり、受部の
 立ち上りは内傾化が著しい。底部にはヘラ削りを施す。
 高坏は有蓋・無蓋の二種がある。第104図10を除いてい
 ずれも短脚無窓である。



第100図 岩倉12号～14号墳外形図

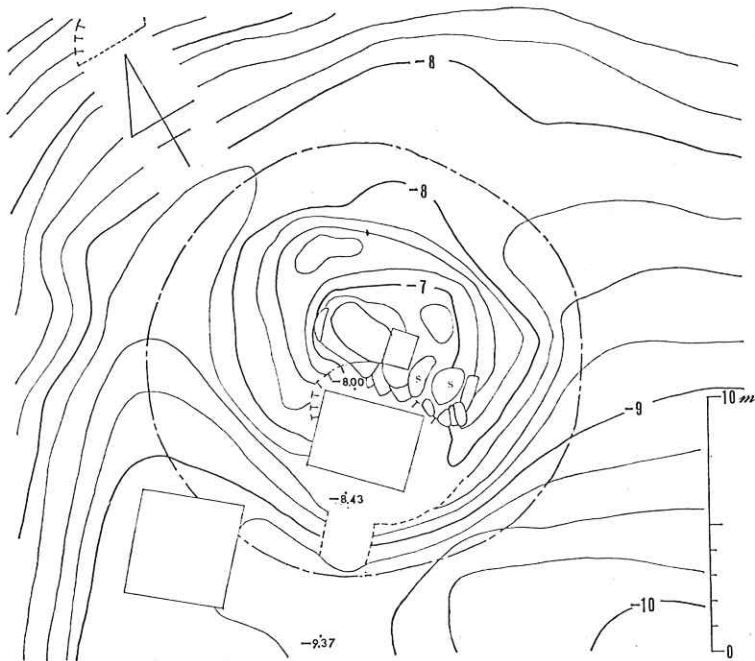
鉄鏃は約一五本の出土があり、羨道の堆積土中から一点の出土があったほかは、羨道の玄門左側壁付近から出土した。完形品の3は全長一五・七センチの平根鏃である。

刀子は二点出土したが、いずれも完形ではない。

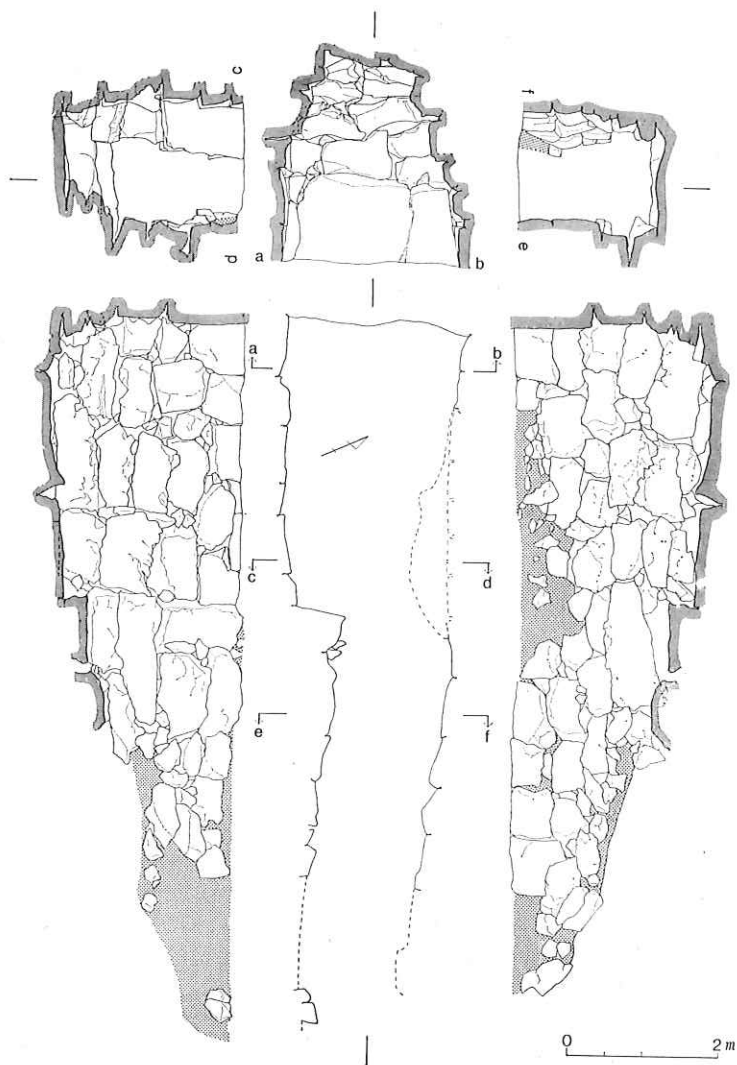
鉾留金具は三点検出され、いずれも形が異なっている。22は菱形、23は長方形、24は片側が円形をなす。径八ミリ程度の鉾を22・23は四本、24は二本打っている。

轡は玄室左側壁近くで検出されたもので、良好な遺存状況であった。銜は二本の棒が中央で連結される形式で楯縫古墳出土例と同様の造りを示す。鏡板は長径六・〇センチ、短径四・五センチあって、環状をなし一方に立開がつく。

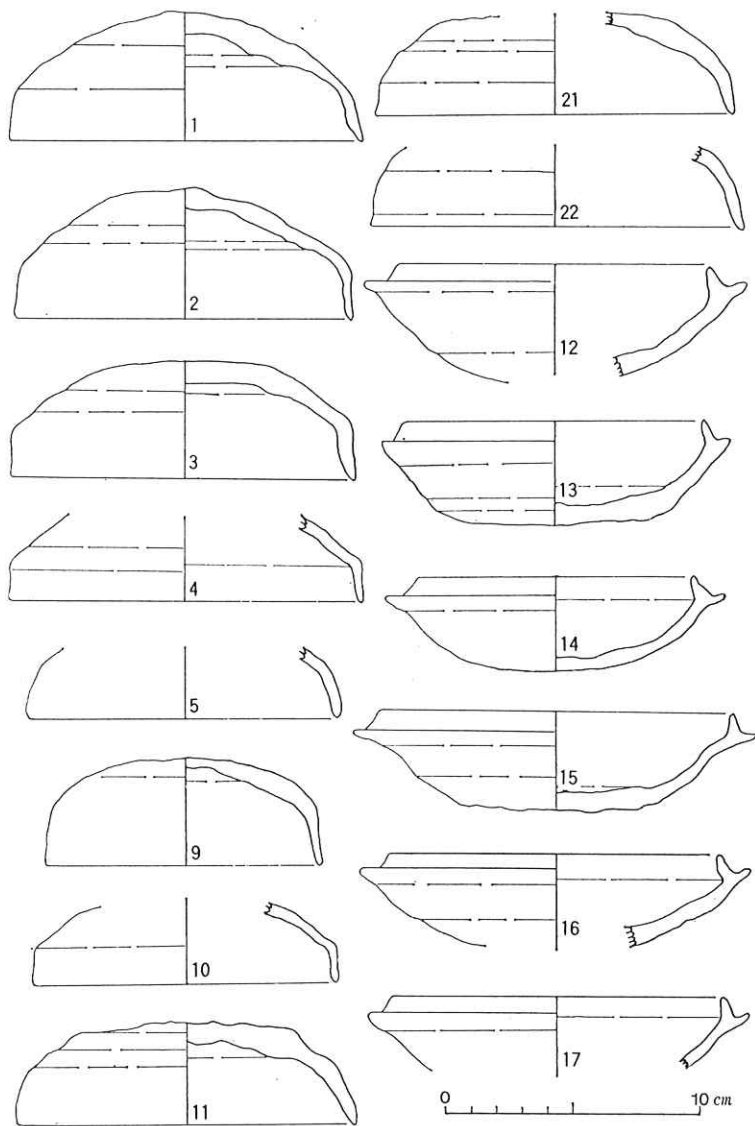
鏡は壺鏡の鉸具頭かこがしらとそれを馬上から吊る兵庫鎖一連が検出された。兵庫鎖は径六ミリの



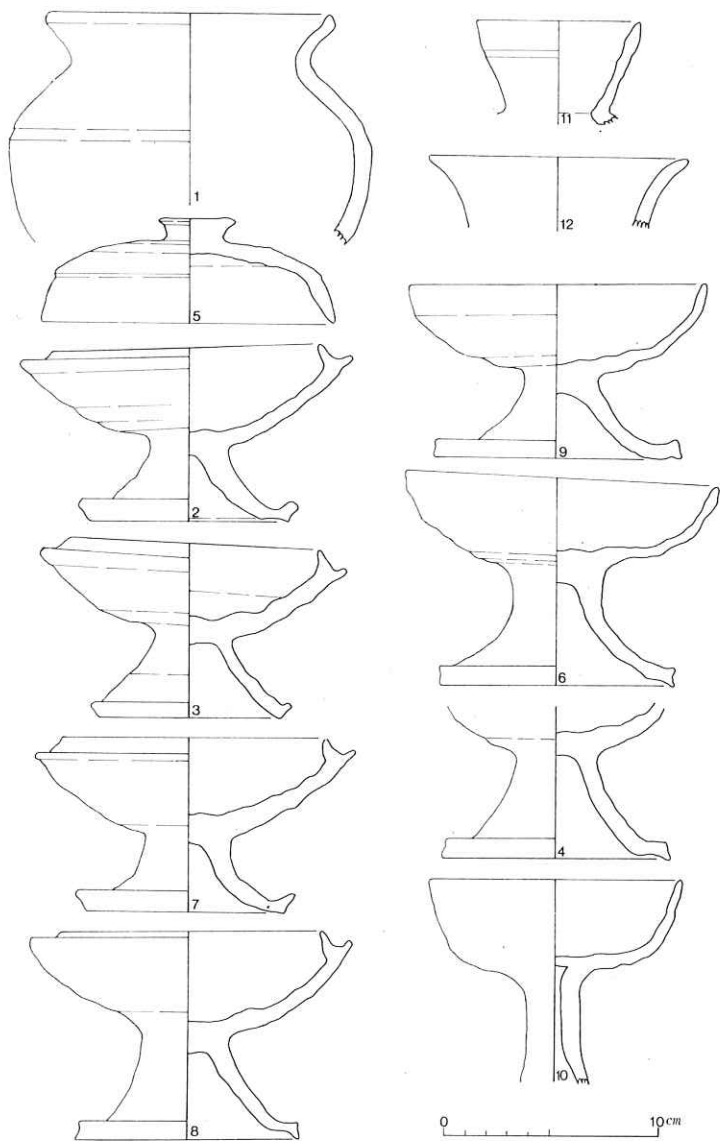
第101図 岩倉18号墳外形図



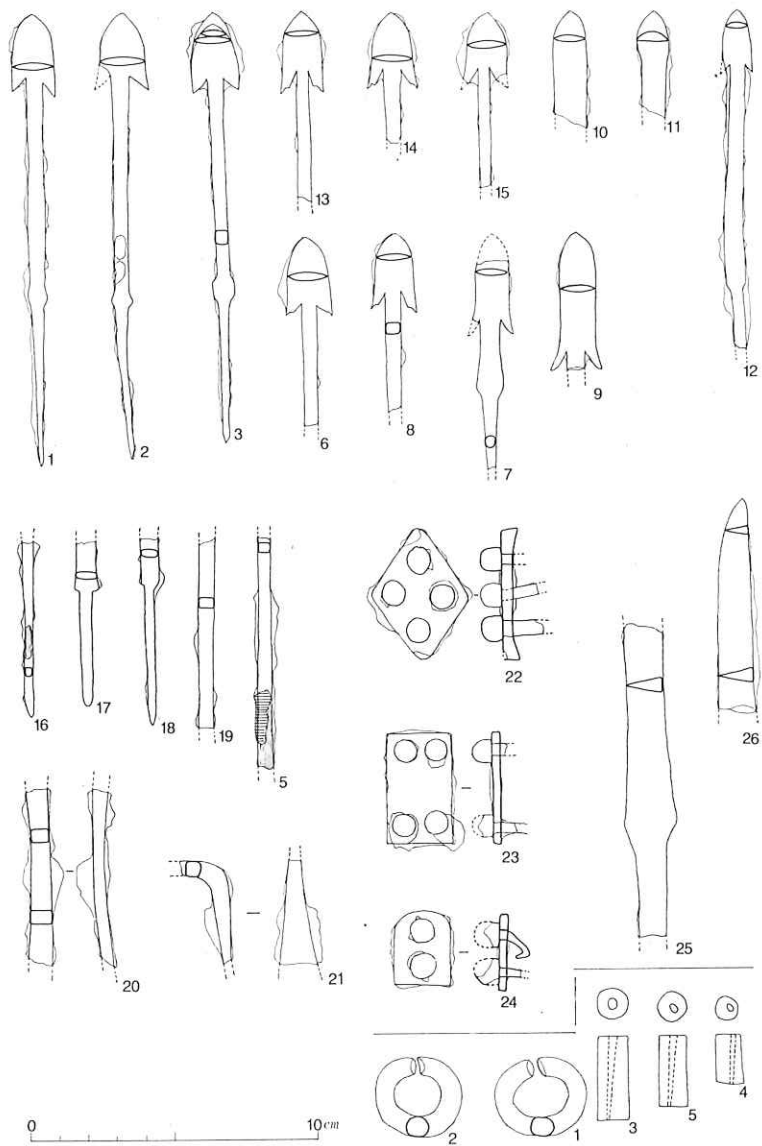
第102図 岩倉3号墳石室実測図



第103図 岩倉3号墳出土須恵器



第104図 岩倉3号墳出土須恵器



第105図 岩倉3号墳出土鉄製品および装身具

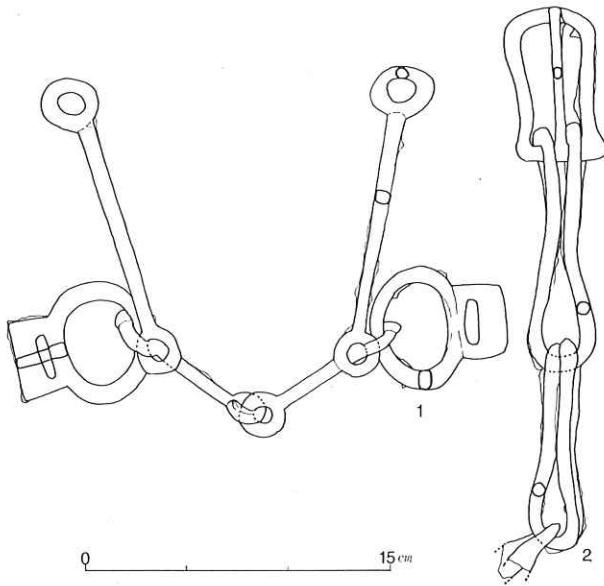
円棒を折り曲げて二個接続し、上部は直接留金具に取付けられている。
 金環は二点出土した。いずれも銅芯金張りである。2は径三・〇センチある。
 管玉は3が玄室から出土し、他は羨道堆積土上層から出土したものである。いずれも片側から孔を明けてい
 る。

本墳の築造時期は須恵器の形態からみて、六世紀後半ごろと考えられる。他の古墳についてはその時期を判定する資料を得ていないが、およそこの頃から古墳群の形成が開始されたものと推測される。

(9) その他の古墳と遺物

町内では横穴式石室の開口したものも何基かあるが、崩壊しているものも多く、十分に観察できないが、それらのうちから二、三の現状を示しておく。

道場に所在する市場古墳群は、一一基の古墳が知られている。いずれも円墳で最も西にある一号墳は、墳丘径一五メートルあって、横穴式石室が南に開口する(図版50)。石室は両袖式で現存全長六・六五メートルある。玄室の長さは三・九メートル、



第106図 岩倉3号墳出土土嚢

幅一・三メートル、玄室の高さ二・三メートル以上ある。側壁の持送りが顕著である。

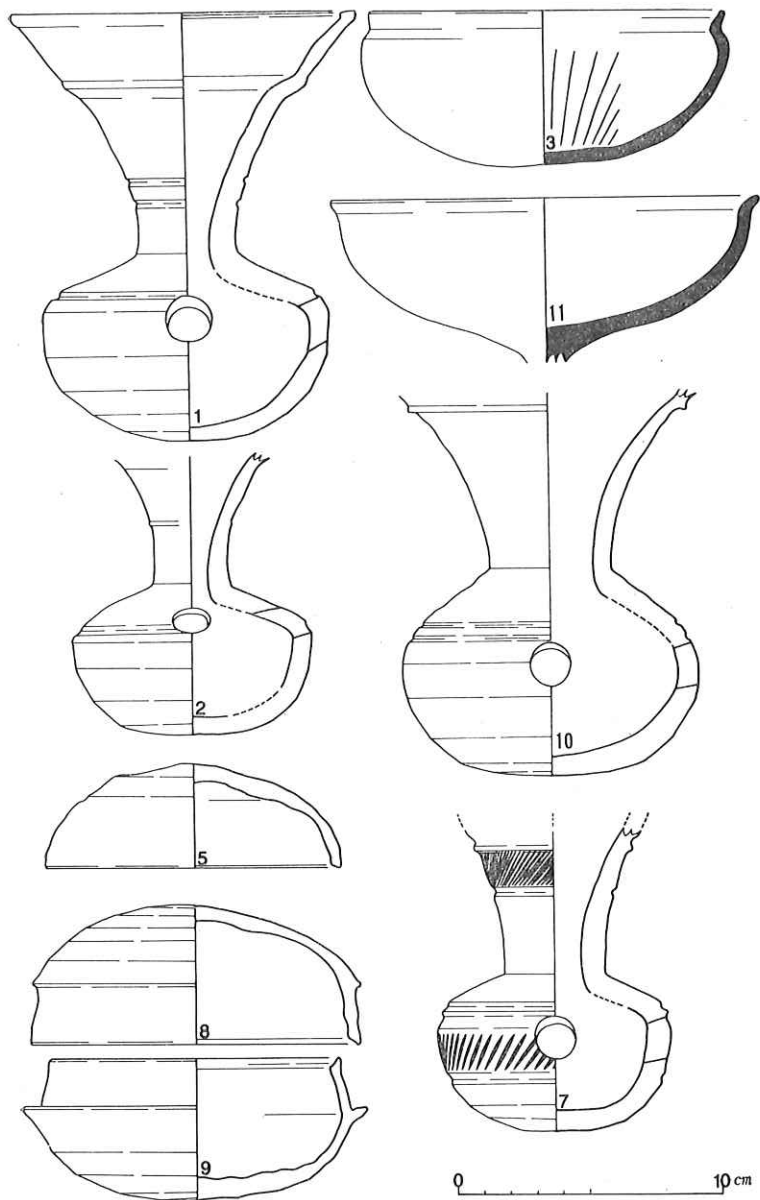
野に所在する野中古墳群は、五基の古墳がある。本古墳群は台地上に立地する古墳である。林の中にある二号墳(図版53)は、南に開口する無袖式の横穴式石室である。石室全長は八・一メートル、幅は一・八五メートル、高一・八メートル以上ある。

三号墳(図版54)は南に開口する片袖式の横穴式石室で、奥壁および羨道は破壊されている。現存全長三・六メートル、玄室長さ三・一メートル、幅一・五メートル程度ある。

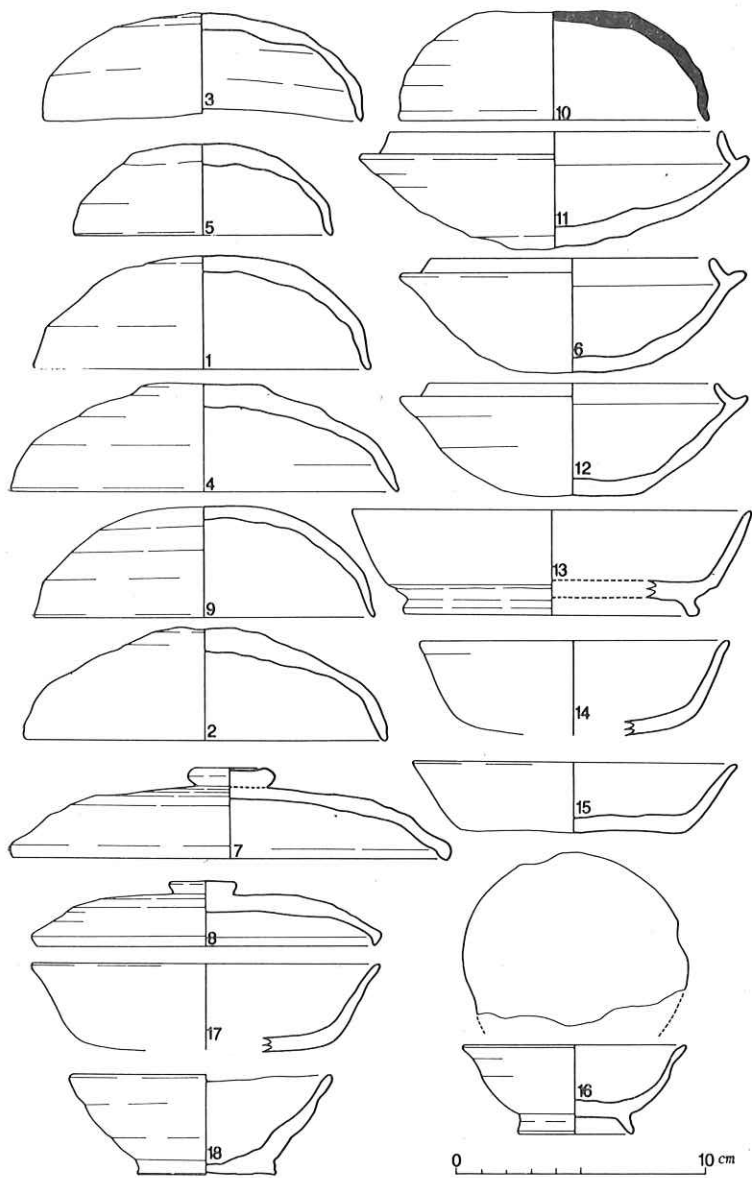
竹貫四号墳(図版77)は竹貫集落から谷間を約一キロほど奥に入った、標高一三〇メートルの丘陵上にある。封土が流出して横穴式石室の天井石が露出している。石室は小形で、玄室長四・九〇メートル、幅一・二五メートル、高さ一・八〇メートルある。奥壁は一枚石である。羨道は埋没しているがおよそ三・一〇メートルの長さがある。

石井に所在する石の辺古墳群は四基の古墳がある。一号墳(図版51)は径一〇メートルの円墳で、持送りの著しい横穴式石室である。石室は全長約六メートルの片袖式である。玄室の長さ二・四メートル、幅二・〇四メートル、高さ二メートル以上ある。

遺物については町内外において、いくつかが所蔵されていることが知られる。しかしいずれもその出土状況などについて詳細が明らかでない。それらのなかで二、三の遺物を紹介すると、銅鏡四面が日高町内から出土していることが注目されよう。図版50に示した鏡は、直径一一・五センチある変形獣帯鏡と呼ばれる文様をもったものである。本鏡は昭和三年五月に刊行された、広瀬都巽氏の『和鏡選集』に集録されているもので、「但馬国城崎郡日高村出土」と記録されている。広瀬氏は古鏡の収集家としても著名な方でもあるが、本鏡が広瀬氏の蔵鏡で



第107図 町内出土の遺物



第108図 町内出土の遺物

あることは、それ以前の大正一五年に刊行された後藤守一氏の『漢式鏡』に明記され、「……日高村大字江原字久斗」とあることによつて知られる。しかしいづれの著書にもその出土状況の詳細は説明されていない。久斗出土鏡については詳細に調査する機会を持たなかったが、鮮明な写真があるのでそれによつて観察することにしよ

う。
内区は四個の乳を間に変形した四つの獸形を表わしている。すでに便化して何を表現したものか判然としないが、おそらく四獸鏡の系統を引くものである。内区の外側は櫛歯文帯、外向の細身の鋸歯文帯がめぐる。外区は外向鋸歯文帯が配されている。鑄上りは良好のようで、おそらくは古墳時代中期ごろに、鑄造された銅鏡と考へても大過ないかと思われる。

その他に京都大学文学部に所蔵された鏡が二面ある。目録には日高町太田谷(多田屋)出土となっている。一面は珠文鏡で約三分の一が残っている。直径三・五センチの小形鏡である。内区に珠文を配し、その外側に櫛歯文帯

がめぐる。各部の寸法は第9表の通りである。さらに一面は直径三・一センチの完形品である。文様は鑄出されていない素文鏡である。

(10) 窠 跡

町内の須恵器窠跡については、遺跡分布図に示したように五基の存在が判明している。

そのなかで中に所在する宮ノ谷窠跡は、昭和三九年に調査が実施された。その詳細については不明であるが、『世界考古学大系3・日本Ⅲ』所載の写真や、当時の発掘状況の写真、および地元に残る

種別		珠文鏡	素文鏡
項目			
面	径	3.5(cm)	3.1(cm)
面	厚	0.11	0.14
鈕	径	0.6	0.7
鈕	高	0.3	0.49
縁	厚	0.12	0.15
縁	型式	平	平
反	り		0.08

第9表 太田谷(多田屋)出土鏡計測表

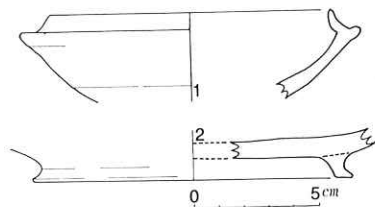
土器の熔着した窯壁などによって、七世紀初めごろの遺存の良い窖窯であったことが知られる。第109図に示したものは中・宮の谷窯跡出土として伝えられるが、窯跡出土品としては完形品でセットをなしていることや、熔着した土器より若干古い年代を示すことなど、疑問の存するところであろう。

第109図1は坏蓋で口径一三センチ、器高五センチの完形品である。口縁部と天井部を別ける稜は鈍いがわずかに残っている。天井部の二分一にヘラ削りが施されている。2は坏身で口径一一・三センチ、器高四・七センチの完形品である。口縁部の立上りは内傾度が著しく端部は丸くおさまられている。底部は丸い。

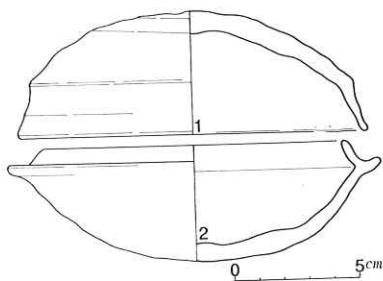
第110図は八代イチゴ谷採集の土器である。窯体の詳細は不明であるが、その散布状況からみて窯跡と考えて過りないものと思われる。

1の坏身は、縁部の立ち上りは低く内傾する特徴をもっている。2は高台付きの坏で、高台は端部が外方に屈曲し、丸くおさまられている。これらの土器は七世紀中葉ごろの年代と考えてよいであろう。

第108図7・8・13・15・17は棚田窯跡採集のものである。棚田窯跡は日置字山田に所在する。現状は道を境にして下方は水田となり、道に接して上方山地の傾斜面に土器の散布がある。若干乱掘を受けているが図示した坏のほか窯壁なども採集されている。現状は一基の窯のようであるが、詳細については不明



第110図 イチゴ谷窯跡出土須恵器



第109図 伝宮の谷窯跡出土須恵器

である。

坏蓋は口径一三・八センチ、器高二・六センチあって、つまみが付く。蓋内面はかえりが消失し、口縁端部は丸くおさめられている。坏身は高台の付く形式で、口径一五・二センチ、高さ四センチある。高台は貼付け高台で、わずかに外方にふんばる。第108図14・15・17はいずれも口縁部の外傾度が大きく、端部は丸くおさめられている。他に直口甕がある。本窯跡の築造時期は七世紀後半頃と考えられる。

その他にすでに破壊されたもので、時期なども不明であるが、窯壁が採集されている庄境・倉谷窯跡ある。

第五節 但馬における古墳

1 はじめに

但馬は北に日本海を擁し、南は中国山地によってさえぎられて播磨に対する。西は因幡、東は丹後・丹波によって画されている。

但馬を流れる四つの河川は、山間を潤して日本海に注ぐが、なかでも代表的な円山川は、朝来郡生野町円山に源を発して、一六本の支流を合せ、総延長約六三八キロ、流域面積約一二八一平方キロにおよぶ最大の河川である。円山川は河口から一二キロ上流の豊岡市でも、落差が一メートル程度しかないといわれ、緩やかな流れをもっている。そのため水運交通が発達し、政治、経済、文化の動脈としての役割を果たしてきた。古墳の分布についても円山川流域における状況は、他地域に比べて圧倒的な数を示し、その隆盛であったことを物語っている。日高町もこの円山川の流域に発展した町で、その恩恵を受けて、但馬の一つの濃密な古墳分布地帯を形成している。その後律令古代国家の誕生によって、その政治・文化・経済の中心地として、日高町にその主要な施設が置

かれたことは次章で述べる通りである。

但馬における考古学的調査は、昭和四〇年度・四六年度および四九年度と、三度の分布調査^⑩によってその概要を把握できるようになったが、なお詳細な点については不明な部分が多く、前方後円墳にかぎっても、その実数はなお流動的である。昭和四七年に和山町城の山古墳の調査に際して、すこし但馬地域の古墳について述べたことがある。その後いくつかの調査も実施されてきたが、それらは主として円山川沿いの古墳であった。本稿ではさきの報告を採録し、それらの成果を追加して概要を説明しよう。

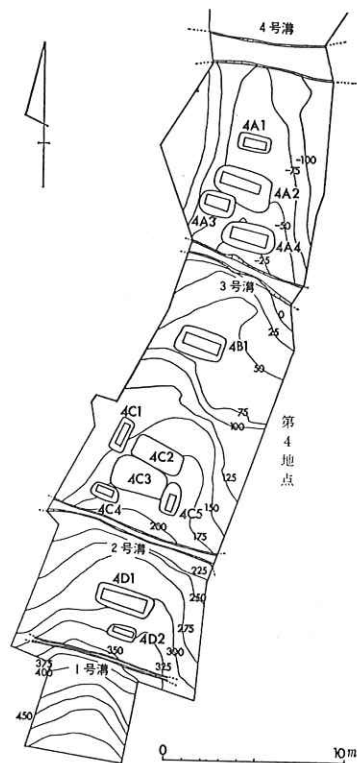
古墳の調査についてはかなり古くから行われているが、その研究史については、『但馬考古学研究史(一)』^⑪にくわしいので、ここでは省略することにした。しかしいずれも個別的な研究で、但馬全域にわたる研究としては、昭和三〇年に出された『但馬の古墳と地名表』^⑫が最も纏まった著作であろう。その後は昭和三五年に『祖先のあしあとⅢ』^⑬によって追加されている。発掘調査も組織的な調査は少なく、遺物の出土は森尾古墳出土鏡をはじめ、小見塚古墳・世賀居古墳^⑭など古くから知られている程度である。当町の代表的な後期古墳として先に述べた榎縫古墳は、山本茂信氏によって昭和三〇年ころに実測図^⑮が作成されている。

2 各地域の古墳分布

1 円山川下流域の古墳

城崎町、豊岡市、出石町地域に所在する古墳については、古くからその一端が知られ、天日槍命伝説と相まって、早くから研究の対象とされてきた。なかでも旧出石郡神美村(現豊岡市)に所在した森尾古墳^⑯は著名である。大正六年に宅地造成中に森尾の丘陵西南端部で発見され、径は一二・六メートルを越えないもので、高さも三・六メートル内外の円墳であつたらしい。埴輪は存在しない。内部主体は地下約九〇センチほどで、小石室が

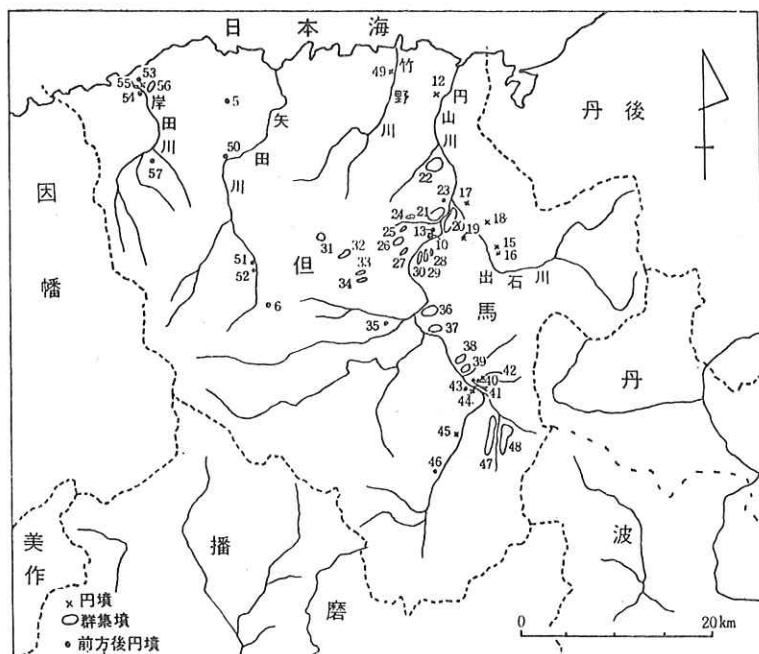
三基発見された。第一石室は東西一・八メートル、南北四八センチ、深さ四五〇四八センチあり、扁平な割石を木口積にした竪穴式石室であった。第二石室は東西三メートル、南北六六センチ、深さ六〇センチ内外ある。第三石室はすでに崩壊していたが、ほぼ同様のものであったらしい。遺物は、三角縁四神四獣鏡（面径二五センチ）、著名な紀年銘鏡である□始元年陳是作神獸鏡・方格規矩鏡・玉類・銅鍔・鉄器などが出土した。その後、昭和五三年に外形測量が行われ、方形墳の可能性が指摘されている。さらに、大正三年には城崎町小見塚古墳^⑩が、土砂採掘の際に遺物の採集が行われている。古墳は丘陵端にある円墳で、主体部の構造は長大な規模を有する粘土礫であった。出土品は面径一八・七センチの変形四獣鏡、面径二一・三センチの三角縁波文帯三神三獣鏡一面・紡錘車・玉類・鉄鍔・刀・剣などがある。また埴輪の出土が確認されている。さらに現状では不明な点もあるが、豊岡市納屋ホーキ古墳^⑪は全長三〇メートル程度の前方後円墳で、その墳丘の付近より弥生時代の土器棺や、箱式石棺が発見されたと伝えられる。それが事実とすれば、恐らく姫路市横山古墳などにみられる、古墳発生の集団墓の可能性もあり、古く位置づけてよいと思われる。ただ現在では、その古墳を現地において該当させることができない。前期の墳墓としては、昭和四九・五〇年の山東町柿坪中山古墳の調査後^⑫、しだいに類例が



第111図 豊岡市妙楽寺墳墓群第4地点

増して、但馬における古墳時代前期の様相が明らかになりつつある。第Ⅱ山図に示した豊岡市妙楽寺墳墓群は、丘陵上に立地し、尾根を二本の溝によって区画し、木棺を次々と埋葬する台上墓と呼ばれる墳墓様式を示している。この例は豊岡市鎌田・下陰古墳群など、その類例が知られる。日高町における西気小学校裏山墳墓も、その一つであろう。中期古墳としては、出石町茶臼山古墳（谷山一号墳）があげられる。茶臼山古墳は北西に延びる低い丘陵突端部を切断して、周濠を配した、径約四〇メートル、高さ約八メートルの三段築成の円墳である。現状は畑地となつてやや旧状を損う部分もあるが、南々西に造り出しかと考えられる突出部残存がみられ、円筒埴輪、形象埴輪が採集されている。内部構造は明治三〇年ころ開墾中に石室に当り、人骨、鉄剣等の出土があつたようであるが、詳細は不明である。いま墳丘二段目に堅穴式石室の天井石と考えられる石材が、一枚転落露出している。なお出石町教育委員会および出石町本覚寺に残る長持形石棺は、中期古墳の指標的内部構造であり、それを内蔵する古墳は、天皇陵ないしはそれに準ずる有力者の埋葬形態と考えられている。兵庫県下でも姫路市壇場山古墳、同山ノ越方墳、加西市玉丘古墳、篠山町雲部車塚古墳など、それぞれの地域における最大級の古墳に内蔵されている。これらのことから出石城築造の際に、但馬最大の前方後円墳が破壊されたと考えられるが、同町所在の入佐山一号墳出土との説も有力であるという。いずれにしても典型的な中期古墳の存在が確実である。また出石高校東側の尾根頂上部にも家形埴輪を出土する古墳があり、あるいは前方後円墳かともいわれているが、現状では不明といわざるを得ない。

後期古墳はかなりの数に達するが、代表的なものとしては、茶臼山の南方にみられる鶏塚古墳が、古くから珠文鏡等を出して著名である。内部構造は現在墳丘中央より西に偏して横穴式石室があり、一部崩壊している。さらに昭和四一年に発見された下安良城山古墳は円形封土中に三基の箱式棺を内蔵し、二号・三号棺からそれぞれ



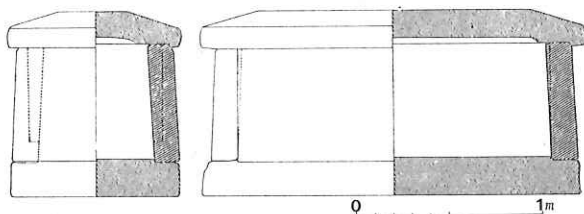
第112図 但馬における古墳時代主要遺跡

6. タツケ平遺跡 10. 祢布ヶ森遺跡 (主体は古墳時代) 12. 小見塚古墳 13. 納屋ホーキ古墳 15. 茶臼山古墳 16. 鶏塚古墳 17. 森尾古墳 18. 下安良古墳 19. 黒谷1号墳 20. 大師山古墳群 21. 西光寺山古墳群 22. 矢谷山古墳群 23. 見手山古墳 24. 山の神古墳群 25. 耳谷古墳群 26. 尼ヶ宮古墳群 27. 定谷古墳群 28. 黒谷酒屋俗古墳群 29. 菖蒲谷古墳群 30. 旧進美寺参道古墳群 31. 岩倉古墳群 32. 猪子垣古墳群 34. 城山・荒神山古墳群 34. 森山古墳群 35. 上山古墳群 36. 大藪古墳群 37. 世賀居古墳群 38. 奥山・広六林古墳群 39. 林垣古墳群 40. 長塚古墳 41. 小盛山古墳 42. 冑塚古墳 43. 池田古墳 44. 城の山古墳 45. 加都大塚古墳 46. 船之宮古墳 47. 山東盆地西部古墳群 48. 山東盆地東部古墳群 49. 太田古墳 50. 原古墳 51. 高井古墳 52. 庵ノ谷2号墳 53. マルダ古墳 54. 浦谷1号墳 55. 二方古墳 56. 松村古墳群 57. 細田古墳

石枕が出土し、二号棺から変形四獣鏡一面が検出された。他に須恵器・剣・刀子
 が出土している。また下安良城山古墳南西の福居にある、独立丘陵上に立地する
 箱根山一・二号墳から、須恵器・銅鏡・勾玉・管玉が出土している。調査の行われ
 た古墳群は、豊岡市矢谷山古墳群・七ツ塚古墳群・西光寺山古墳群などがある。
 いずれも六世紀代に属するものである。特に見手山前方後円墳は、全長約三五メ
 ートル、高さ三メートルの規模をもち、墳形は古式古墳の特徴を示している。内
 部主体は支室長さ四メートル、幅一メートルあり、わずかに右袖を有し、長さ約
 一・五メートルの羨道をつけた竖穴系横穴式石室である。須恵器の中には貝が入
 れられていたことが知られている。恐らく六世紀中頃のものと考えられる。最も
 群集墳で規模の大きいものは、円山川と出石川の合流点を見下す大師山古墳群
 で、約一〇〇基ほどあるといわれる。城崎町には家形石棺を内蔵する二見谷古墳
 が知られている。二見谷古墳群は石棺を納める二基の古墳があり、一号墳は刳抜
 式の家形石棺、四号墳は第113図に示した組合せ式の家形石棺である。時期は六世
 紀後半頃で、但馬地方に類例の少ない石棺例を呈示している。

口 円山川中流域の古墳

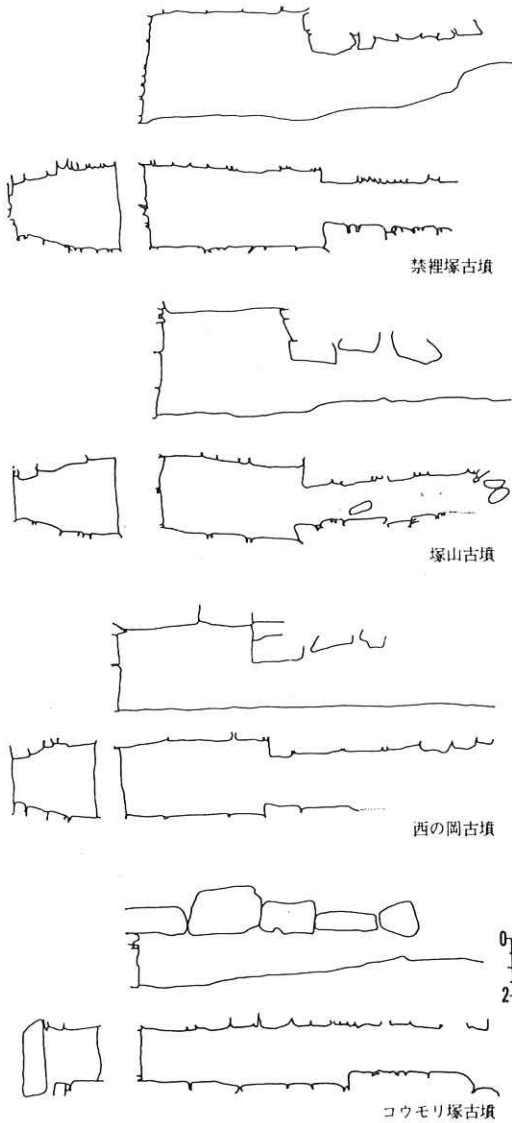
八鹿町・養父町を中心とする地域である。氷の山に源を発する八木川流域の国木には、全長約四〇メートルの
 前方後円墳である上山古墳が所在する。墳丘は良く旧状をとどめているが、二〇センチ×三〇センチ程度の円礫
 がみられ、内部構造はおそらく横穴式石室ではないかと考えられる。他に大林古墳が全長約二〇メートルの前方



第113図 城崎町二見谷4号墳家形石棺

後円墳といわれるが、不明な点が多い。

古くから知られている養父郡世賀居古墳出土遺物が著名である。面径一三・六センチの六獣鏡・馬具などがあ
る。本古墳は付近最大の古墳群である五群二九基の世賀居群集墳に含まれている。関宮町にも吉井群集墳（二七
基）・三宅群集墳（一五基）などがある。いずれも小規模な円墳で、横穴式石室・箱式石棺を内蔵する。養父町
では大藪古墳群が著名で、最近その測量調査が実施された。第114図はその石室図である。それによると古くから



第114図 養父町大藪古墳群石室図

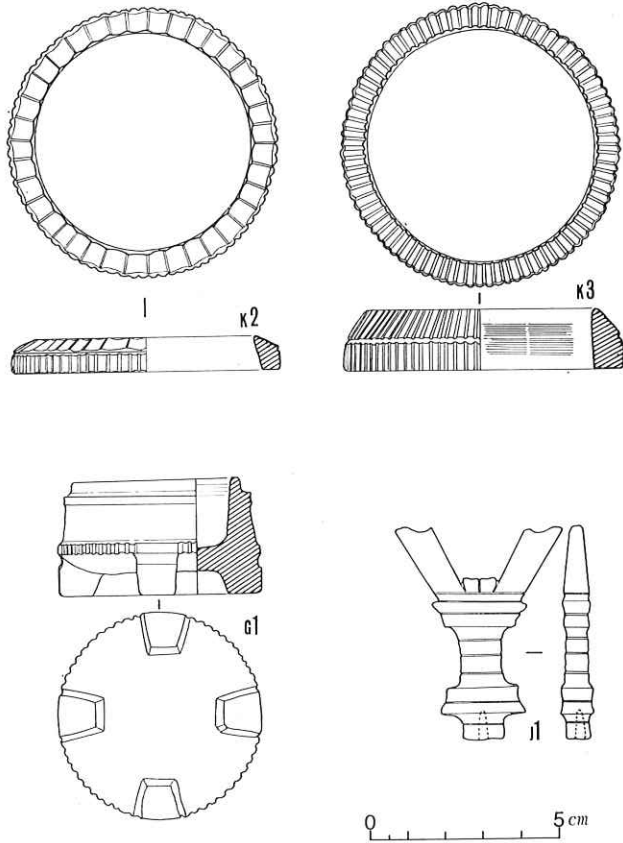
著名な禁裡塚古墳の石室は全長一〇・八五メートル、玄室長五・九五メートル、幅二・七三メートル、高さ三・五メートルあって但馬における最大級の石室である。

八 円山川上流地域の古墳

和田山町・山東町を中心とする地域である。本地区における前方後円墳は一〇基の古墳があげられているが、疑問のあるものもあって、にわかはその数を決定

したい。

昭和四七年調査の城の山古墳・池田古墳は、国道九号線のバイパス工事に伴って調査された。城の山古墳は丘陵突端部に位置する径三五メートルの円墳である。内部主体は全長七・六〇メートルの木棺で、銅鏡六面・玉



第115図 和田山町城の山古墳出土石製品

類・刀剣・鉄製工具類が出土した。築造時期は四世紀末葉頃と考えられ、但馬における前期古墳の一つの様相を知ることができる。池田古墳は全長一二八メートルの但馬最大の前方後円墳である。古墳の周囲は全長一七二メートル、最大幅一〇二メートルの周濠を配した大形古墳である。山陰線敷設の際墳丘を削平されているが、なお墳丘下部は旧状をよくとどめている。古墳は三段築成で、円筒埴輪・壺形埴輪を配し、墳丘斜面には葦石を葺いた典型的な盛期の古墳である。岡田にある長塚古墳^⑤は、全長約七〇メートルの前方後円墳で、石室を内蔵する可能性が強い。長塚古墳北西五〇メートルの冑塚古墳は、径約三〇メートル、高さ五メートル程度の円墳で、造り出しを有するかと思われる。

独立丘陵上に立地する小盛山古墳は、全長六〇メートルの前方後円墳である。内部主体は不明であるが、その墳形からみて後期の古墳と推定される。

さらにこれらの古墳から北二〇〇メートルの円墳は、T字形の横穴式石室を内蔵する径一〇メートル程度の古墳がある。加都^{かづ}にある丸塚古墳は、昭和四〇年度の分布調査で前方後円墳となっているが、現状では円墳のみがみられる。また車塚古墳も後円墳のみが残り、横穴式石室が露出崩壊している。前方部に当る部分は開墾されて畑地となり、前方後円墳か否かは決定することはできない。しかし立地する状況からみて、前記丸塚古墳と同様円墳の可能性が強い。

朝来町桑市に所在する墳丘長約八〇メートルの船之宮古墳は、周濠を有する前方後円墳である。現状は墳丘上に社殿などが建立されている。また濠も前方部北西部のみ湛水され、他は埋められている。山際ではあるが平坦地に築造された古墳で、池田古墳の発見までは、但馬最大の古墳として知られていた。前方部の高さはかなり高いが、濠の型は比較的古い古墳の形状を示し、立地などから考えて中期の古墳と考えてよいと思われる。なお松

の森古墳も前方後円であったようであるが、忠魂碑建立のため前方部は削平されて確認できない。後円部にあたる地点から板石の箱式棺が発見され、玉類・鉄鏃・土器が出土したという。塚の壺古墳も前方後円墳といわれるが、現状では径二五メートル、高さ四メートル程度の円墳がみられ、北東に延びる平坦な台地上にあるが、おそらくは円墳と考えられる。

後期の古墳は、頭槌大刀を出した筒江古墳^㉑や上山五号墳^㉒（春日古墳）などは、後期の代表的古墳であろう。なお山東町塩田古墳および粟鹿神社古墳は、前方後円墳ともいわれるが不明な点が多い。ただこの狭少な盆地を望む丘陵縁辺部に六〇〇基を越える後期古墳が存在することは注目に値する。前述の日高町の状況と相似た現象である。

二 矢田川下流域の古墳

矢田川河口の香住港を望む丘陵部に、二〇基足らずの古墳が所在する。他は佐津川流域に散在するにすぎない。いずれも円墳で径二〇メートルを越えるものはほとんど見られない。内部構造は箱式石棺が多い。いま内部主体の知られているもののうち、箱式石棺はおよそ七割ほどあり、きわだった特徴を示している。時期的には後期古墳の範疇に属するものである。

ホ 矢田川中流域の古墳

下流域よりさらに古墳の分布は少ない。現在は五・六基程度で、うち原小字天神田にある原古墳は、前方後円墳といわれるが確認されていない。他は横穴式石室を内部構造とする円墳である。

ヘ 矢田川上流域の古墳

村岡から福岡に至る川沿に四〇基ほどの古墳が知られている。うち福岡周辺には一〇基程度の二つの群集墳が

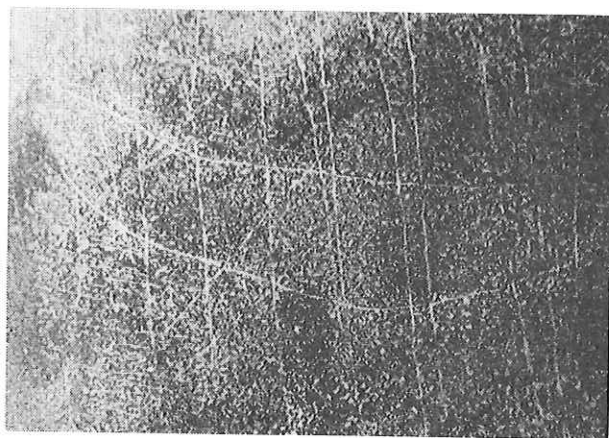
ある。八幡山古墳群および大寺山古墳群である。

八幡山六号墳は竪穴系横穴式石室で鏡・刀・玉類・土師器・須恵器・馬具などが発掘調査によって出土している。銅鏡は小形の珠文鏡である。庵の谷二号墳は前方後円墳で玉類・土師器が出土している。石室は竪穴式石室で、内部に箱式石棺を内蔵するといわれている。高井付近には全長三五メートル程度の前方後円墳である、高井古墳がある。内部構造は不明である。三之谷一号墳は美道右側壁に第116図のような刻線で描かれた鳥らしきものの装飾がある。その他二基の線刻画古墳が新しく発見されている。昭和四五年に調査された文堂古墳は、金銅荘の頭槌大刀、図版17に示した鏝頭大刀が出土している。この地はさらに埋葬法や出土遺物などに、特徴的な遺物が知られている。

ト 岸田川下流域の古墳

岸田川沿いの丘陵上に後期古墳が約一〇〇基ほど確認されている。

マルダ古墳は全長約二〇メートルの前方後円墳で横穴式石室を内蔵するといわれている。墳形については丘陵突端にあって明確ではない。また浦谷一号墳も全長二三メートルの帆立貝式の前方後円墳と伝えるが、マルダ古墳と同様、丘陵突端部にあり墳形については確実ではない。群集墳で比較的まとまって古墳数の多いのは、二日



第116図 村岡町三之谷1号墳線刻画

市北方丘陵上の古墳群である。そのうち二方古墳は古く（明治四〇年）に掘られ前方後円墳といわれているが、現状では確認できない。須恵器の出土があり、内部構造は横穴式石室で家形石棺が内蔵されている。

チ 岸田川上流地域の古墳

温泉町の古墳で確認されているものは少ない。現在のところ五基のみである。うち細田古墳は全長約二〇メートル程度の前方後円墳といわれ、石室があったらしい。他はすべて円墳でほぼ横穴式石室を主体とする古墳である。

3 まとめ

前方後円墳の分布を中心に述べてきたが、但馬の古墳分布についての調査は、やや他地域に比べて不十分である。またそれらが兵庫県下各地域に比して、どのような差異があるかは、今後の比較検討が必要であろう。

前方後円墳の総数も、現在の調査では確実なところ一一基を数え、前方後円墳の可能性の高いもの、および破壊されたが前方後円墳と考えられたものを含めても二〇基足らずである。この数は播磨・丹波・摂津に比して少ないといえる。

分布の状況は七群に別けて述べたが、最も古墳分布の密であった地域は円山川流域であり、特に前方後円墳の分布は円山川上流域の和田山町付近と、同下流域の豊岡・出石地域であろう。豊岡・出石地域における古墳分布はかなり早くから知られ、天日槍伝説と相まって注目をうけてきた。いま第112図によって前方後円墳の分布をみると、豊岡・出石地域は三基、和田山地域は五基と、後者の方が数的に優勢である。従来からも但馬最大の前方後円墳とされていた船之宮古墳は、朝来町に所在し、出石地方には前方後円墳としては見るべきものがなかったにもかかわらず、和田山町周辺地域の古墳時代については論じられたことは少ない。すなわち、但馬の古墳時代

地域	規模
イ. 円山川 下流地域	13 ^{●●} 23
	16 [●] 27 ^{●●} 30 ^{●●} 19 ^{●●} 15
ロ. 円山川 中流地域	35
	25
ハ. 円山川 上流地域	41 [●] 40 [●] 46 [●]
	42 ^{●●} 45 ^{●●} 44
ニ. 矢田川 下流地域	
ホ. 矢田川 中流地域	50
ヘ. 矢田川 上流地域	52 [●] 51 [●]
ト. 岸田川 下流地域	53 ^{●●} 54
チ. 岸田川 上流地域	57

第10表 但馬における主要古墳の規模（番号は第112図に一致する。上段は前方後円墳，下段は円墳。）

といえは、出石地方のそれを指すかのごとく理解されていた嫌いがないでもない。各地域における外形規模を集計した第八表によって二・三の点を述べておきたい。

豊岡・出石地方の前方後円墳はいずれも三〇メートル程度の古墳であり、確実なものとしては径四〇メートル

の円墳である茶臼山古墳があげられる。他に

円墳で径三五メートルの黒谷一号墳がある。

他に日高町には径二五〜三〇メートル程度の

円墳が一六基ほどある。二〇〜三〇基程度の

群集墳に沿うように位置する。

本地域における古墳規模は、前方後円墳に

おいてはかなり規模が小さい。しかし円墳は

茶臼山古墳に代表されるように、大形の円墳は

が認められる。大形円墳の大部分は径二〇〜

三〇メートル程度の、群集墳のなかに存在す

るもので、そのほとんどは後期古墳である。

この地域における前期古墳の実態が、しだ

いに明らかになってきている。それらは丘陵

頂上に築かれた台上墓である。実年代につい

てはなお十分に説明できないが、森尾・茶臼

山古墳の出現する以前から、この種墳墓様式が採用され、それらは併行して築かれたものである。後期古墳になると、木棺直葬墳である豊岡市七ツ塚、同西光寺山古墳群例などは、明確に封土を有しているが、埋葬形態には大きな変化はない。したがってこの地域では弥生後期以降の台上墓形式の墓制から、若干の盛土を行う墓制への変化はみられるものの、本質的な墓制の変化はみられない。森尾古墳や茶臼山古墳などの状況は極めて限られた特殊な埋葬例と考えられよう。大多數の墳墓は弥生時代以来大きな変化がなかったと思われる。墓制の大きな変化は横穴式石室の採用であろう。それらは大陸伝来の新しい埋葬法であり、埋葬觀念の変化とともに、その築造数が急激に増加することが知られている。これらの現象が古墳時代後期の社会構造の一端を如実に示していることは疑えない。要するにこの地域では、広範囲な地域を統括する卓越した首長墓は成立しなかったと推測される。

和田山周辺地域における古墳の規模は、池田古墳が全長一二八メートルの規模を示して最大である。続く規模は船之宮古墳の全長七六メートル、長塚の七〇メートル、小盛山古墳の六〇メートルなどがある。円墳でも城の山古墳の三六メートル、冑塚古墳の二八メートルと大形の円墳がみられる。このような古墳規模のあり方は加古川地域、姫路地域の古墳の状況に近い。特に池田古墳の規模は、姫路地域最大の壇場山古墳、丹波地域最大の雲部車塚古墳、加西地域の玉丘古墳など、各地域における最大の古墳と同程度の規模を示している。しかしこの地域が前記の姫路地域などと異なっているところは、本地域が全長一〇〇メートル程度の古墳がみられないのに比べて、姫路付近では、輿塚古墳の約一一〇メートル、瓢塚の約一〇〇メートルなどの古墳がみられることである。このような和田山町周辺の古墳にみられる規模の特徴は、丹波地域にもみられる状況である。

円山川中流域の養父地域では上山古墳が全長約四〇メートルの前方後円墳である。さらに大林古墳が、全長約二〇メートル程度の前方後円墳といわれている。

矢田川流域、岸田川流域の各古墳もほぼ同様の規模を示している。

次にこれらの古墳の时期的な位置づけについて若干の説明を行うが、厳密な編年は、現在の知見では容易なことではない。とくに後期の細分については、その可能性を残している。

出石・豊岡地域における时期的位置づけは、ホーキ古墳があるいは発生期古墳の可能性があるかと思われるが、不明な点が多い。確実に最も古く位置づけられるのは森尾古墳である。主体部構造は小形の竪穴式石室を三基内蔵し、集団墓的な様相を残しており、遺物の組合せについても古い様相を呈している。いまのところ本墳が、この地域における高塚古墳の埋葬様式を示した、最も古い例であろう。四世紀後半から五世紀初め頃と思われる。小見塚古墳は粘土槨であったらしいこと、遺物の組合せから四世紀後半から五世紀初め頃と思われる。茶臼山古墳は墳形の築造は丘尾を切断し周濠を配する大形の円墳で、形象埴輪の出土など、前期末ないしは中期初頭の古墳と考えられる。後期の前方後円墳は見手山古墳が確実に、六世紀前半頃のものである。鶏塚古墳なども同じ頃と考えられる。

和田山町周辺地域では、現在最も古く位置づけられるのは城の山古墳で、四世紀末葉頃の時期と考えられる。

池田古墳の遺物は埴輪以外は検出されていないが、墳形などから推定して、五世紀初頭～中頃の古墳と考えられる。船之宮古墳は、従来はやや新しく中期末頃に編年されているが、立地および周濠などから考えて、それよりは古く位置づけられる可能性がある。和田山町では、後期の前方後円墳と考えられる小盛山古墳は、独立丘陵上にあつて全長六〇メートルの規模をもっている。これは各地域の規模と比較しても決して小さいものではなく、また上山五号墳（春日古墳）のように金銅製の馬具・金銅荘大刀・銅鏡などを出土する古墳、また頭槌太刀を出土した筒江の古墳など優れた遺物の出土があり、関東地方の古墳時代後期の出土遺物と類似する。矢田川下流域

では小規模な円墳のみで、いずれも後期古墳に属するものようである。矢田川中流域では、現在原古墳のみが前方後円墳としてあげられているが、現状では四〇メートル〜五〇メートル程度の盛土らしきものがあって、古墳らしいというが確実ではない。その他の古墳では規模的にはみるべきものは知られていない。矢田川上流域では、庵の谷二号墳が古く位置づけられるようである。内部構造は、二・二メートル×一・二メートルの竪穴式石室内に、一・八メートル×〇・五メートルの内法りを示す箱式石棺が安置されている。勾玉類の出土があった。最近調査された文堂古墳は豊富な遺物が出土しているが、鏢頭大刀、珠文鏡などとともに、須恵器が伴出している。七世紀前半のもので、須恵器には漆で描いた記号文が残っている。

岸田川下流域においては、確実に中期の古墳と考えられるものは見つかっていない。前方後円墳ともいわれる二方古墳は、横穴式石室に石棺を内蔵するが、須恵器の出土があり、後期の古墳である。浦谷一号墳も横穴式石室を主体部とする古墳で、いまのところ五世紀に遡る古墳は知られていない。

このようにみると、但馬において顕著な古墳の营造がはじまった地域は、円山川下流地域の出石・豊岡付近や、円山川上流域の和田山町を中心とする地域であった。その後両地域はそれぞれの中心的位置を占めて発展したようであるが、なかでも和田山町付近においては築造が開始された当初から、他地域に比して卓越した首長の存在があったようである。これは出石・豊岡地域が五世紀代には径四〇メートルの円墳である、茶臼山古墳しか造ることができなかったのに比べて、全長一二メートルの前方後円墳を築造する状況が示している。この現象は後期になってもかわらなかつたようである。しかし各地に群集墳が急速に形成される六世紀中頃になると、出石・豊岡付近の古墳群は大師山古墳群などもみられるように、大形の群集墳が形成されてはいるが、日高町付近や養父町域にも代表的な横穴式石室墳が築造されている。また円山川上流地付近は、山東町付近にも群集墳の

顕著な築造が認められるなど、代表的な古墳群地帯が、しだいに各地に分散することが知られる。

村岡町域については、その地理的に限定された盆地のなかで、五世紀後半頃から、小形ながらも庵ノ谷二号墳・高井古墳などの前方後円墳が築かれている。さらに文堂古墳や長者ヶ平古墳群などの円墳・方墳が築造され、盆地内の代表的な古墳の変遷をたどることが可能である。

その他の地域では五世紀の後半頃に古墳の営造が始まったようである。群集墳の形成も円山川中流域および岸田川下流域以外は顕著ではなかったようである。

〔注〕

① 蒲生君平 明和五年（一七六八）～文化一〇年（一八一三）。栃木県宇都宮の人。『山陵志』二巻をあらわした。歴代の山陵の踏査によって、陵墓の変遷などを述べている。

② ゴーランド William Gowland 一八四二～一九二二年。イギリスの考古学者で、明治五年から明治二十一年まで滞在し、余暇を利用して日本の主要な古墳を調査した。「日本のドルメンと古墳」(The Dolmens and Burial Mound in Japan, 1897)と「日本のドルメンとその築造者」(The Dolmens of Japan and their Builders, 1899)という論文を書いた。後者の論文に使われた前方後円墳の測量図は、これまでの日本の略図などくらべて、正しい測量図と作図法で行われたもので、昭和以後の古墳の形態研究に多くの影響をあたえた。

③ 坪井正五郎 文久三年（一八六三）～大正二年。江戸で生まれ、明治一九年に会誌を発行して、日本人類学会および『人類学雑誌』を創設、発刊した。人類学会に多くの貢献をしたが、栃木県の足利市公園の古墳や、東京都芝公園丸山古墳の発掘は著名である。

④ 浜田耕作 明治一四年～昭和一三年。大阪府南河内郡に生れる。明治四二年に京都大学に考古学研究室を創設して、多くの

調査を実施した。また『通論考古学』を大正一一年に著わして、わが国の考古学の研究法を示した。

⑤ 邪馬台国 中国の史書である『魏志』「倭人伝」や『後漢書』「東夷伝」に記された、日本のなかの一つの国の名前。当時倭(日本)は三〇国以上の小国にわかれ、邪馬台国の女王卑弥呼を共通の王としていたことが記されている。邪馬台国が所在した地として、九州説と畿内説が対立して今日にいたっている。

⑥ 喪葬制 大化二年(六四六)三月二日に出され、王以下六段階にわけて墳墓を規制し、人馬の殉死や墓中に宝をおさめることなどを禁止した、いわゆる「大化の薄葬令」。

⑦ 天武陵 奈良県高市郡明日香村大字野にある。天武天皇とその皇后で、のちの持統天皇とを合葬した墳墓。この御陵は天武天皇の死後造営された、実年代の明らかでない古墳である。嘉禎元年(三三五)の三月二〇・二一日に盗掘されたことが、『阿不幾乃山陵記』や藤原定家の日記『明月記』に記録され、その墳丘や内部構造、出土品について知ることができ

る。

⑧ 銅鏡による年代研究 年代の確実な中国鏡を基礎にして、我国古墳出土鏡についてその編年観を示した。特に邪馬台国の位置について、大正十年頃、富岡謙蔵・高橋建自・梅原末治氏らの鏡の研究による成果が、畿内説の論拠とされた。

⑨ 土師器による編年 最初に土師器の編年観を示したのは杉原荘介『原史学序論』昭和二年においてであろう。最近では石野博信・関川尚功『纏向』一九七六年がある。

⑩ 大山西墳(伝仁徳陵) 大阪府堺市大仙町にある。全長約四八六メートルの日本最大の前方後円墳。明治五年に前方部で堅穴式石室が発見され、内部に長持形石棺が安置されていた。

⑪ 岡山県湯迫車塚 岡山市湯迫にある、全長約四五メートルの前方後方墳。後方部に堅穴式石室が内蔵され、一三面の鏡・刀・剣・槍・鉄鏃が発見されている。

⑫ 奈良県茶臼山古墳 奈良県桜井市外山にある。鳥見山の尾根の末端を切断して造られた、全長一九〇メートルの前方後円墳。後円部に長さ六・八メートルの堅穴式石室があり、それらを囲むように壺形の土師器を配列していた。

- ⑬ 大阪府紫金山古墳 大阪府茨木市宿久庄にある。全長一〇〇メートルの前方後円墳。後円部に長さ七メートルの竪穴式石室があり、鏡一二面や石製品・玉類や武器・鉄製農耕具が出土している。
- ⑭ 誉田山古墳（伝応神陵古墳）大阪府羽曳野市にあり、全長四一五メートルの日本第二の大古墳で、二重の周濠を配している。陵の周囲に大小の陪塚があり、典型的な中期古墳の代表とされている。
- ⑮ 奈良県別所大塚古墳 天理市別所にある、全長一一五メートルの前方後円墳。後円部径七五メートル、前方部幅九〇メートルある。墳丘北西側には周濠がめぐっている。横穴式石室内に組合式石棺があった。
- ⑯ 和田山町小丸山古墳 兵庫県朝東郡和田山町岡田にある。小丘陵頂上部に立地し、全長約六〇メートルの前方後円墳で、前方部幅および高さがそれぞれ後円部をうまわっている。
- ⑰ 丸墓山古墳 埼玉県行田市所在の埼玉古墳群内にある。径一〇〇メートルの大円墳である。同古墳群内にある稲荷山古墳から、銘文を有する鉄剣の出土したことは著名である。本墳はその古墳より、体積的にははるかに大きいものである。
- ⑱ 和田山町城の山古墳 兵庫県朝来郡和田山町東谷にある。径三五メートルの兵陵突端部に造られた円墳である。木棺内から銅鏡六面の他、石製品・玉類・刀剣・鉄製工具が出土した。檀本誠一・山本三郎他『城の山・池田古墳』昭和四七年
- ⑲ 出石町茶臼山古墳 兵庫県出石郡出石町谷山にある。径四〇メートルの円墳。内部主体は竪穴式石室らしい。武庫川女子大考古学研究会『出石町茶臼山・鶏塚測量報告』昭和四八年
- ⑳ 豊岡市立石一〇五号墳 兵庫県豊岡市立石に所在する、円墳に造り出しを有する古墳。円墳の径一五・五メートル、造り出しの長さ六メートルある。埋葬主体は木棺直葬で、玉類・刀子・鉈・鉄鏃・馬具類などが出土した。
- ㉑ 城崎町小見塚墳 兵庫県城崎郡城崎町湯島にあった円墳。粘土槨から銅鏡二面・紡錘車・玉類・鉄鏃・刀剣類が出土した。
- ㉒ 奈良県宮山古墳 御所市室にある全長二三八メートルの前方後円墳。後円部南側の竪穴式石室内に、長さ約三メートルの長持形石棺がおさめられていた。石棺蓋の上面に格子状の彫刻がある。
- ㉓ 大阪府津堂城山古墳 藤井寺市津堂にある全長二〇〇メートルの前方後円墳で、周濠や外堤、さらに周庭帯を配する。明治

四五年に後円部より長持形石棺が発見された。石棺内からは鏡・玉類・刀剣が検出され、石室内からは鏡・銅鏃などの他、鉄製品・玉類が出土している。梅原末治「河内国小山城山古墳調査報告」『人類学雑誌三五―八―一〇、三六一―四七』大正九・一〇年

24 京都府久津川車塚古墳 城陽市大字平川にある、全長一五六メートルの前方後円墳である。後円部から長持形石棺をおさめた竪穴式石室を検出し、棺内から鏡七面をはじめ玉類・石製品・刀剣、棺外より甲冑・刀剣・石製品などが出土している。

25 奈良県石舞台古墳 奈良県高市郡明日香村島ノ庄にある。一辺の長さ約五〇メートルの方墳で周濠を配する。早くから封土上部を失っている。昭和八年に調査され、横穴式石室は我国最大級のものであることが判明した。女室の長さ七・七メートル、同幅三・四メートルある。天井石のうち最大のものは七七トンに達する。浜田耕作『大和島庄石舞台の巨石古墳』京大考古学報告一四 昭和一二年

26 城崎町二見谷古墳群 城崎町二見谷にある円墳群で、四基の古墳がある。昭和四九年に調査され、その後環境整備が行われて見学することができる。榎本誠一・小川良太・加古千恵子『二見谷古墳群』昭和五〇年

27 中国馬王堆一号墳 昭和四七年中華人民共和国湖南省長沙市で発見された古墳で、約二一〇〇余年前に造られたものである。三重の棺内から軀候夫人と考えられる女性の遺体が発見された。副葬された絹織物、竹筥、楽器、漆器、木俑などの、腐触しやすい大量の遺物の出土は圧巻であった。

28 栃木県七廻り鏡塚 栃木県下都賀郡大平町にあった円墳で、昭和四六年に調査され、舟形木棺および組合式木棺が腐触しないままに出土し、その内部には毛髪や弓・矢・獸毛などの遺存があった。

29 末西五四地点 兵庫県三田市末西にある。昭和五三年に調査が行われた、古墳時代後期の集落跡。山本三郎「AW-54（集落跡）調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概要』昭和五三年

30 兵庫県川島遺跡 弥生時代中期から鎌倉時代にいたる遺構が検出されている。石野博信・榎本誠一・大村敬通・阿久津久・松下勝・山本三郎他『川島・立岡遺跡』昭和四五年

- ③① 鞆口 金属あるいはガラスなどを熱したり、熔かすために人工的に風をおくる装置を「ふいご」と呼ぶが、その鞆から炉内に風を送る管のさきは、熱にたえるように粘土で包む。その粘土が管状の土製品として出土したもの。
- ③② 加賀片山津遺跡 石川県加賀市にある。玉および石製品の生産遺跡。作業場として使われた竪穴住居址約四〇軒が検出され、石製腕飾り類・勾玉・管玉の未製品や、その製作に使用された砥石などが出土している。
- ③③ 鉄鋌 奈良県宇和奈辺古墳の陪塚である高塚古墳などから出土した、鉄器の素材と考えられている鉄板。両端がすこし広くなつた長方形を呈し、大小がある。大形品は長さ三〇〜四〇センチ、小形品は一六センチ前後ある。
- ③④ 大阪南部窯跡地帯 堺市・和泉市を中心に分布し、南北・東西およそ一五キロメートルにおよぶ窯跡群。日本で最初に須恵器生産が開始され、約六〇〇年間操業された。
- ③⑤ 竹野町鬼神谷窯跡 兵庫県城崎郡竹野町鬼神谷にある。山麓斜面を造成したあと須恵器が採集されたもので、その立地などから窯跡と考えられている。瀬戸谷皓「鬼神谷窯跡の資料」『兵庫県埋蔵文化財調査集報第三集』昭和五〇年
- ③⑥ 謎の土器 岡山県邑久郡牛窓町師楽遺跡の出土土器から、「師楽式土器」と命名されたものである。土師器の系統をひく粗製土器で、瀬戸内沿岸や島に遺跡が多い。長くその用途が不明であったが、近藤義郎氏によって製塩に使われた土器であることが明らかにされた。
- ③⑦ 馬場ヶ先古墳の調査 昭和三二年八月に円山川の治水工事の堤防敷となる際に、島田清氏によって調査が行われた。
- ③⑧ 羽根山古墳の調査 昭和四一年八月に、日高東中学校建設工事の土取場となつた水上宇羽根山で発見された。発見後松本正信氏らの調査が行われた。
- ③⑨ 丹後作り山古墳 梅原末治「桑銅村蛭子山・作り山両古墳の調査(上)・(下)」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書第一二・一四輯』昭和六・八年
- ④⑩ 楯縫古墳の調査報告書 昭和四九年八月に楯縫古墳の外形実測、および石室の清掃・実測を行った。日高町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『楯縫古墳・岩倉古墳群調査報告書』昭和五一年

- ④① 三度の分布調査 兵庫県教育委員会『遺跡分布地図及び地名表』昭和四〇年 兵庫県教育委員会『遺跡分布地図及び地名表』第九集 昭和四六年 同上 第三分冊 昭和四九年
- ④② 瀬戸谷皓『但馬考古学研究史(一)』昭和四六年
- ④③ 山根武『但馬の古墳と地名表』昭和三〇年
- ④④ 神戸新聞社『祖先のあしあとⅢ』昭和三五年
- ④⑤ 梅原末治『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告第二輯』大正一四年
- ④⑥ 山本茂信『橿縫古墳群』昭和三〇年
- ④⑦ 直良信夫『近畿古代文化叢考』昭和一八年
- ④⑧ 榎本誠一・小川良太・加古千恵子『柿坪中山古墳群第一集』昭和五〇年
- ④⑨ 榎本誠一・瀬戸谷皓・小川良太・加古千恵子『妙楽寺遺跡群』昭和五〇年
- ⑤① 瀬戸谷皓『鎌田古墳群・下陰古墳群発掘調査報告』一九七六年
- ⑤② 岡本久彦『長持形石棺』『いずし川』昭和四七年
- ⑤③ 末永雅雄『日本の古墳』昭和三六年
- ⑤④ 石部正志『但馬』『日本の考古学』昭和四一年
- ⑤⑤ 岡本久彦『下安良城山古墳調査概況』『兵庫県埋蔵文化財調査集報第二集』昭和四八年
- ⑤⑥ 正木明男『豊岡市福田・矢谷山古墳群調査報告』昭和三九年
- ⑤⑦ 山根武・亀田博・瀬戸谷皓『七ツ塚古墳発掘調査報告』昭和四三年
- ⑤⑧ 瀬戸谷皓・味田晃『西光寺山古墳群発掘調査報告書』昭和四七年
- ⑤⑨ 武庫川女子大学『和田山町岡田古墳群測量報告』昭和四九年
- ⑥① 榎本誠一『兵庫県和田山町筒江出土の頭槌大刀』『古代学研究六七号』一九七三年

- ⑥⑩ 榎本誠一「上山5号墳・大谷2号墳」『秋葉山墳墓群』昭和五三年
- ⑥⑪ 中村典男氏の教示による。